

日本結核病学会第50回総会記念誌「結核研究五十年」序

第50回日本結核病学会会長 安平 公夫

日本結核病学会は大正12年に結成され、北里柴三郎氏を会長に東京で第1回総会が開催された。その後、先の戦争の影響で、数年の中断をみた以外は、毎年総会が開催され、昭和50年4月には京都で第50回総会開催の運びとなった。顧るにこの50年の、前半の四半世紀は結核病学にとって苦闘のとき、後半の25年は化学療法による勝利のときともいうことができるであろう。しかし、これは医学を“いやし”の学として眺めた側面であって、その自然科学としての側面では、結核菌という特異な構造と構成成分を持つ細菌と、それによって起こされる病巣や免疫状態を中心に、病原とは何かを問う、あくなき努力が積み重ねられてきたのである。

まず初めに、学会創立当時の人と研究に触れておきたい。学会機関誌“結核”第1巻の雑報その他を参照すると、学会創立の推進母体は市立療養所長会議であったと推察される。すでに大正8年以来施行されていた結核予防法の要請により、公立結核療養所を次第に充実させる方向が示されていたのであるが、大正11年当時においては、東京、京都、大阪等7市1県に療養所が既設され、他に6療養所の建設が進行中であった。このような結核対策振興の気運の中に、同年6月東京で開催された所長会議で学会創立のことが話題となり、東京の田沢鎌二氏、大阪の有馬頼吉氏らの尽力のもとに、翌12年早々に創立総会を開催、次いで4月3日、北里柴三郎氏を会長に、東大法医学教室において第1回総会が開かれた。西暦1923年のことであった。

創立当時の学会の一つの焦点は、大阪の有馬、青山氏らの創製になる結核免疫元AOであった。有効な結核対策の皆無であった当時としては、その効果に対する期待も大であった。しかるに折からBCGの有効性に関する諸外国でのデータが積み重ねられ、わが国でも今村氏のような熱心な賛同者がその勢を増し、終にはAOはその影を薄くしてしまった。この間治療の面からの結核対策はほとんど進展せず内科的には人工気胸術、外科的には胸郭成形術に頼っていたと言っても過言ではない。一方、臨床病理よりする豊かな観察の機会、結核の発病と進展に関する広い興味を喚起した。第2回総会会長佐多氏のランケ3病期説の紹介、第3回総会での佐多、緒方、有馬氏らによる特別講演「結核の初感染と再感染」、第7回総会の熊谷氏による「肺結核の発生機序」、第9回総会における岡氏の特別講演などはすべてこの領域に輝く研究成果であり、更に集団検診の普及よりする臨床データのうえに立って、後に熊谷氏らの「続初感染発病説」が展開された。

ストマイの発見は1944年であり、これが結核治療薬としてわが国に現れたのは、初期には主としてアメリカ進駐軍の好意によるものであったとあってよい。それに引続いて、PAS、INHの使用が可能となり、戦後の結核対策はその様相を一変した。わが国では梅沢氏によってカナマイシンが開発され、抗結核薬の主要なメンバーの一つとなっているのは周知のことである。またこれらの化学療法剤に助けられて胸部外科の術式は見事に開花し、わが国でもいろんな新しい手法が試みられ、成功を取

めたことも忘れることができない。いずれにしろ今や結核は容易にコントロールしうる病気となった。結核による死亡は激減し、加療日数も減少し、入院よりも外来治療が普通となった。その術式の完成にもかかわらず肺結核に対しては、現在では外科手術の必要性さえも次第に少なくなっている。治療の面からみるときは、結核には過去の異常な社会的関心が失われ、むしろ普通の病気となってしまったとあってよい。

一方これと平行して、純粹自然科学としての結核研究にめざましい進展のみられたことも、最近の結核病学の特徴である。結核菌および結核症を対象として、形態学、生化学、免疫学、実験病理学等の分野において、次々と世界に誇るに足る業績が生み出されてきた。結核の科学は極めて特殊な領域にある。そして今日では、その特異性のゆえに、その特異性を通じて、一般的なもの、普遍的なものへの貢献が可能であることを結核病学は明瞭に示してきた。

結核病学50年の歴史は、それに係りをもったすべての生命の、悦びと歎きの、誇りと悔恨の映し絵である。多くの人達が、その中で生き、生かされ、そして死んでいった。しかし、それだけではない。これはまた新しいものへの手導きであり、希望である。私達が結核病学会第50回総会を記念して本誌を編集することを決意したのは、会員諸氏が栄光あふれる結核病学の過去をではなくて、来らんとする未知なものに眼を向け、新しい冠をめざして力強い歩みを踏み出されることを願ってのことに他ならない。

最後に本記念誌の発足より完成まで、本誌編集委員、執筆者、企画参加者、その他多くの会員諸氏、また事務局より厚い支援を受けたことを感謝する。

——「結核研究五十年」序文（昭和50年）を再録